

---

# 義姉ちゃんと俺と

出下夕御

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

義姉ちゃんと俺と

### 【ZPDFード】

Z2240P

### 【作者名】

出トタ御

### 【あらすじ】

前作【幼なじみと俺と】の様に、【彼女と俺とシリーズ】第一弾。

今度は義姉です。

義理のお姉ちゃんとです。

下手くそです。

でも、見てください。

俺、飛鳥 真はしがない高校一年生。俺の住む街は都市部に当たる。窓を開ければ、昼間「ミミロミ」した街は夜になると、とても綺麗だ。そういうところで俺は存在している。

家族は俺と血の綱がって無い義姉ちゃんとの一人暮らし。義姉ちゃんは俺と同じ高校の三年。しかも生徒会長で文武両道で顔も可愛いいから一日一回は下駄箱の中は義姉ちゃん宛でのラブレターで一杯だ。そう、義姉ちゃんはそれくらいモテる。

義姉ちゃんの名は鷹田 流奈。たかだ るな義姉ちゃんは極度のブリコンで、俺はし�ょっちゅう被害に遭っている。

今日は日曜日で休みだ。今日も義姉ちゃんに振り回されるだろうけど。

「真ちゃん起きな」

「うん……あと5分」

「だあめー！」

そういうにて俺の布団を取つ払う。

「義姉ちゃん寒いーー！」

「寒いのは冬だからでしょ？」

腕組みをしつつも、俺を見る義姉ちゃんの顔はすでにヤバい。

元々義姉ちゃんと俺との関係は、俺のお袋が亡くなってしまい、そのあと親父が今の義姉ちゃんのお袋さんと付き合って結婚したが、数年前に一人とも病死してしまった。その時の俺はまだ中学三年だ

つたから、受験の悪影響ともなってしまった。もしその時義姉ちゃんが支えてくれなかつたら、普通に高校には通えなかつたと思う。色々な意味で、義姉ちゃんには感謝している。

「まだ眠たいの？」

義姉ちゃんが持つっていた俺の布団を取り、俺は不機嫌さを交えて話す。

「とーぜんだろ？ 昨日は昨日で色々疲れたんだぜ？ まず近所のじつちゃんが腰を打つただろ、次にヒツタクリに出くわして、その次は交通事故になりかけ、ついには帰りのバスに乗り遅れる始末」

「我が義弟ながら不幸なのね」

「それに比べて、義姉ちゃんは登校すればラブレターの海に遭われ」

「私つてモテるから」

「生徒会の役員会とかでも人気が高いだけでなく、親衛隊やらファンクラブやら創設出来て」

「でも監修しよ？」

「俺が義弟なだけで差別されたり、羨まされるし」

「へえ～…」

「だからもう、色々な意味で疲れたからまだ寝かせてくれよ。頼むから

すると義姉ちゃんは腕を組み何やら考え込んだあと、手を口元、何やら閃いた様子で笑っていた。

「じゃあおねーちゃんも入れて入れてーーー！」

「ヤダ

キツパリと反論したが、もう義姉ちゃんは体の半分を俺のベッドの布団の中に入り込んでいた。

「お邪魔し……」

「俺の部屋からでてけーーーー！」

俺は布団から出ると、義姉ちゃんを部屋から出した。ドアの向こうから「ケチ！」と、義姉ちゃんの声が聞こえてくる。

俺は無視して、パジャマから私服に着替えてケータイの電源を入れ、部屋を出た。

一階のリビングに下りれば、少し不機嫌な義姉ちゃんが朝食を作つていた。

「そんなに一緒に寝たかったのか？」「

「まあ、半分半分かな？」

「曖昧すぎんだろーーー！」

「別にいいじゃん」

「つてか、納豆出せつて昨日言つたろ?...」

「だつて納豆嫌いなんだもん」

「仮にも姉貴なんだからよ、好き嫌いはどうなんだよー。」

しばらぐ口論（？）みたいな事を続けつつも朝食を食した俺ら一  
人。このあと、普通に義姉ちゃんが洗うのだが、洗濯等の洗い物は  
俺担当なのだ。それ故に、義姉ちゃんの下着はもう慣れた。

（）最近俺は思う。義姉ちゃんは胸はちっちゃい方なのに、何故  
あんなにも人気があるんだ?分からん。  
フと、俺のケータイがなる。画面を確認すると、あいつからだつ  
た。

「はい」

『ヤツホー 真君元気してたー?』

電話の相手は幼なじみ菜月なしき 主刹すてら。一つ年下で義姉ちゃんとは日  
知の仲らしい。

「主刹ちゃん、何の用?」

『御姐様をお呼びなさいーーー。』

「あー…………義姉ちゃんなりもつ家出て、今頃何してるか……」

事実、俺の義姉ちゃんは放浪癖（軽い意味で）がある。でもしつ  
かりと帰宅はしている。

그런데、主刹ちゃんは義姉ちゃんにめつかれていたんで、百合疑

惑が浮上してこる。ま、俺は気にはしないが。

『じゃ、また連絡するね』

なんでだろ？ 微かに怒りさえ感じる。

数分後、義姉ちゃんは帰宅してきた。どうやらただの散歩らしい。

「むはーっ」

「ぐえッー！」

義姉ちゃんのもうひとつ必殺技の【胸元ダイブ】は俺限定の技らしく、未だ俺以外の被害者は出ていない。それが今、俺に当たった。

「義姉ちゃん！ 何すんだよーーー！」

義姉ちゃんは答える。

「可愛い義弟を可愛いがってるんだよ？ 感謝しなさい」

そういうて、倒れた俺の腰の上で馬乗りの状態で、無い胸を張つて言った。そんな感じだから、初対面の人から幼く見られるのだ。例外もあるが。

かなり話もズレたが、まあいいか。

「まあ、そんな義姉ちゃんが好きなんだなこれが」

「ん？ なんか言った？」

「 まあ …… 」

その後、俺は始めて義姉ちゃんを後ろから抱いたのは、言つまでもない。

完

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2240p/>

---

義姉ちゃんと俺と

2010年12月10日16時31分発行